

# 成果報告書

記入日 2020年 4月 16日

氏名 小川 湧司	渡航先国名 ナイジェリア	所属機関 一橋大学大学院 / イバダン大学
研究テーマ： ナイジェリア南西都市部における IT 開発とテックハブの形成に関する人類学的研究		
研究期間： 2019年 3月 ~ 2020年 1月		
研究成果（概要） ナイジェリア南西都市部の IT 開発とテックハブの形成を追いかける中で発見した「IT」という存在が、「腐敗」「詐欺」「(テクノロジーの) オープン性」との関係において複数性を持つことを描き出した。		
研究成果（詳細） 2018年および2019年にかけての合計11か月にわたるフィールド調査に基づき、ナイジェリア南西都市部におけるコンピュータを使って仕事をする若者たち＝「テックガイ」たちとIT（情報技術）開発の様々なプロジェクトとの中で浮かび上がってくる諸関係を民族誌としてまとめた（修士論文として提出）。西アフリカの経済大国におけるコンピュータテクノロジーを扱う若者たち、彼らのコミュニティ、そしてグローバルなネットワークを巻き込む多様なプロジェクトが主要な研究対象とした。本研究が特に問題にするのは、2010年代以降のナイジェリアのIT分野で働く若者たちが、その実践をめぐる関係においてどのような「IT」の存在を生み出すのかという点であった。 こうした「IT」などの科学技術をアフリカで語る際に、本稿ではどのような立場をとるのか。この方法論的問いは、アフリカが西洋の「科学技術」を常に「受け取る」側として描かれてきたという背景を考えた時、困難な現実と直面する。というのは、現在ITはいかにも西洋、アメリカの西海岸シリコンバレーからやってきた理想と実践の連なりのように（ナイジェリアでも）思われており、それをナイジェリアの「テックガイ」たちがコピーしているように一見思われてしまうからである。こうした議論は、バーブルックとキャメロンの「カリフォルニア・イデオロギー」をめぐる論文を含めた幅広い範囲で支持され、グローバル化による世界の均一化やネオリベラリズム的な市場原理の押し付けが批判の対象になる。ここで問題なのは、カリフォルニアからやってきたITの理想と実践を詰め込んだ移送可能な「パッケージ」としてのITという存在がどこまで強固に出来上がっているのか、それは現地において変容可能なのかという問いである。この問いに対し、筆者は、ブルーノ・ラトゥールらのANT（アクターネットワーク理論）的な実在構築の前提、つまり「実在の強度は関係をうまく成立させることであり、関係をうまく成立させることは強力な実在を作ることであり」という前提を利用しながら、パッケージ化されていないが関係の中で実在するようになる「IT」を複数描き出すという立場をとった。		

こうした問題を扱う上でナイジェリアを事例とする理由は、(1) 大きく経済成長の見込まれる地域であり、欧米の IT 企業の投資先、もしくはテックハブ運営企業のような IT 教育と起業支援を行う企業のマーケットとして大きな役割を果たしていることに加えて、(2) 経済不況の中で IT 産業への期待が空回りしているように思われる、という事情から、「IT」が関係の中で作りなおされるモメントが多くあるからだ。

研究の主要な成果となる修士論文では、1章でナイジェリアにおけるコンピュータや IT の発展史を端的にレビューすることで、それ以降の記述の背景情報を提供した。その後は「テックガイ」たちを追いかけたフィールドワークから得たデータを元にしながら、ナイジェリアにおける「IT」の概念をめぐる関係の記述、序章で定めた方法論と1章の背景的情報を踏まえて、3章分の民族誌的考察(2章、3章、4章)を行った。

2章『『ハッカソン』の実践と腐敗の遍在性の中で』では、2000年代以降、テックガイたちには本来パッケージ化された IT として立ち上がっていたように当初思われたものが、腐敗の遍在性によって完全に包括されてしまうことにより、ナイジェリアの社会の病理の一例とされてしまい、それ自体のみにおいて語ることでできないもの、すなわち腐敗という強力な実在の一樣態へと変わってしまった流れを記述した。ナイジェリアのテックガイたちは、IT 開発を駆動するために白人の世界から資金を調達する力を持った「オガ(「ボス」の意)」たちの腐敗について語る。こうした語りとナイジェリア社会全体に広がった腐敗の言説の中で、「IT」は腐敗によって説明されてしまう。もしくは腐敗によってそれ自体のみにおいて実在できなくなり、腐敗という強靱な実在の一部へと組み込まれる。こうした「腐敗によって説明しきれられてしまうもの」は、それ自体の特徴というよりもそれを説明する腐敗の遍在性によって圧倒されてしまっているように見える。しかし、テックガイたちが、彼らにとって「オガ」たちの関わっている腐敗した IT に対し、「コーダー」などの立場をとって距離を置くやり方が見受けられ、この交渉の結果は4章で見られるように、腐敗した IT をまた新しい存在へとずらしていく過程が生まれていることも見た。

3章「糾弾者としてのテックガイ→詐欺師としてのテックガイ」は、1980年代から続くナイジェリアの詐欺の歴史の中で、2000年代ごろに現れた IT がさもはじめから詐欺とつながっていたかのように構築されてゆき、詐欺の道具としての IT という実在が現れた過程を追いかけた。この IT の実在構築の過程にあたっては、テクノロジーを実際に触るテックガイがインターネット詐欺師である「ヤフーボーイ」と同一視されてしまいかねないイメージが副産物として作り出されている。さらには、詐欺とのつながりをもっていた呪術もこの構築過程に参入し、悪魔的なテクノロジーとして IT (実際は IT を指示するノートパソコン) が現出する場合すらあり、この時に「ヤフープラス」は昔からいたにもかかわらず新しい名前を持って再登場した。

4章『オガ』にも『ヤフー』にもならない何者か』では、アクレのあるテックハブにいるテックガイたちが、どのようにして2・3章の双方の構築過程から生まれた二つのITに対してどのように自らの位置どりを行うのかという点を描いた。彼らは、このときに「オープンソース」の概念をキリスト教の神とのアナロジーにおいて改変していた。その改変させられたオープンソースの概念を、すでに構築されたIT（特に2章で見られた腐敗の一部としてのIT）との関係に置くことによって、現在不発に終わっているように見えるナイジェリアのIT開発を別の方向へずらす。それによって、ババシレ＝ダニエルの定期した「共有」から始めるオープンソースに基づいた理想のITを目指し、テックガイ自身も「オガ」でも「ヤフー」でもない仕方でキャリアを作り出そうとしている。

この三つの短い民族誌的断片の考察は、すべてナイジェリア南西都市部における「IT」の動態的実在であるといえる。単一のテクノロジーとしての「IT」があって、それがパッケージ化された状態で西洋から入ってくるという発想は理解しやすいが、本稿で描いた複雑な（実際はさらに複雑であることが察せられる）関係の中でそうしたパッケージは崩れ落ちる。すなわち「IT」は決して単一ではありえず、腐敗や詐欺の歴史に関わり、あるいはテックガイたちの成功への熱望とオープンソースの理想と関わることによって、「多重」(Mol 2002＝モル 2016)とも言えるかたちで実在している。さらに、この実在しているモメントのみが認識されるものとしてあるのではなく、その過程で語られる腐敗の遍在性(2章)、詐欺と呪術の絡まったヤフーボーイの歴史(3章)、オープンソースの理想を神とのアナロジーで改変(4章)といった部分もインフォーマントたちの記憶の中に残っている。すなわち、構築された実在の中にまだそうした過程は残っており、語られもするのだ。したがって、一言で説明できない「IT」の話が始まるときには、ラトゥールが科学的事実の研究から導き出したような「構築過程が閉じられ切ってもはや動かない」ようなブラックボックスとして「IT」が実在することはない。しかし、一度強力に作られた「IT」の実在を変えていくことは大変な仕事である。例えば、「腐敗」したITや「詐欺」の道具としてのITを変えていくには、ナイジェリアのテックガイたちがまた別の関係項を持ちこんだり、もともとある関係を歪ませたりするような開発の営為が不可欠であり、またそうした方向へと彼らが向かっていくであろうと筆者は期待している。

#### (参考文献)

- Mol, Annemarie. 2002. *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*. Duke University Press. (=モル、アネマリー. 2016. 『多としての身体：医療実践における存在論』浜田明範・田口陽子(訳)、水声社。)

## 留学中の生活・研究でのトピックス

留学中はイバダン大学・Tafawa Balewa 寮（オヨ州イバダン市内）に滞在し、近隣にあるアフリカ最大都市であるラゴス、また連邦技術大学アクレ校があるオンド州アクレ市を中心に調査を行った。基本的にはイバダン、ラゴス、アクレを行き来する形で生活した。

調査の上では、多くの人々の助けと親切を得た。特に、2018 年の予備調査時から仲間として受け入れてくれた GreenLab Microfactory（オヨ州イバダン市、オンド州アクレ市）、GE Garage Lagos（ラゴス州ヴィクトリア島）の 2 つのテックハブには長く滞在し、特に前者の GreenLab には調査結果に関するコメントもいただいている。また、イバダン市での生活には苦労も多かったものの、寮の仲間との交流が心の助けになった。

ナイジェリアのビジネスシーンで多用されるのは英語（ナイジェリアなまり・ピジン含む）だが、私の調査した南西部では特に Yorùbá 語が話されており、その習得には時間を要した。2018 年夏に東京外国語大学アジア・アフリカ研究所で基礎的な文法と表現を教わったが、実際にヒアリングで使うレベルになるまでには到着後に労力がかかった。私がある程度まで Yorùbá 語を使えるようになったのは、イバダン大学 Yorùbá 語センター（Ibi-iṣẹ̀ èdè Yorùbá）の協力によるものであり、私がナイジェリア特有の表現を理解する大きな助けになった。

当初以上に、詐欺と腐敗というセンシティブな話題を扱う研究へと焦点がシフトしていったため、調査の上ではかなり困難なものとなってしまった。多くの情報が噂として流れるだけで、新聞は多くを語らないため、その情報群を一つの形にまとめていくのには苦心させられた。この点については、寮の仲間や、テックハブの仲間たちとのディスカッションで鍛えられた。「白人」（アジア人はナイジェリアでは白人とみなされる）がナイジェリアの暗い部分について語ることを嫌う人もいたし、研究自体の政治性は理解しているつもりでいたが、ナイジェリアの友人たちと議論する中で、お互いに折り合いをつけながら記述を行う方法を探ることにした。完全に成功したとは思っていないが、私の話に付き合ってくれた友人たちに感謝したい。

## 今後の社会貢献

本研究を通して、ナイジェリアの全体的な社会経済状況の概要のみならず、IT 産業の発展に対し妨げとなり、また同時に新しい関係を生み出す腐敗や詐欺といった要素を細かく知ることとなった。こうした関係性は、IT という一見中立であるようにも見える「テクノロジー」が実際的には様々な他の関係の中で変わりうることを示している。特にナイジェリアにおいては、腐敗と詐欺という強力な説明概念とそれに伴う様々な事件の中で IT が理解されている。例えば、インフラストラクチャーとして携帯電話は普及したものの、それはナイジェリアにおける産業構造に新しい価値を付け加えたと同時に、現地の関係性のなかで変容しているのである。そして、そうした状況を打開するために西洋発の概念が改変されたり、あるいは全く別の関係を生み出す。こうした状況を踏まえて草の根の知識普及や雇用の創出を進めていかない限り、いくら欧米企業が投資を行って人材を育てても結果的に人材流出を招く以外の結末は見えない。人類学的な民族誌研究は、私の行った IT と詐欺や腐敗の関係といった細かい事例からこうした大きな視座を与えてくれるという強みがある。私個人としては、本研究を踏まえ、今後もナイジェリアのテックハブに関わりつつ、日本の諸団体とどう連携してお互いに恩恵のある関係を作り出せるか模索している。



写真1: 中心的なフィールドとなったオンド州アクレ市のテックハブ「Green Garage (GreenLab)」の仲間たち。



写真2: 受入教員として書類の準備をしてくださり、イバダン大人類学部での発表の機会を与えてくださったアデレミ・アジャラ教授と。大学セミナー室前にて。



写真3: 首都アブジャにおけるあるハッカソンの様子。



写真4: 中心都市ラゴスの大規模テックハブへの訪問。